

aboutを主要部とする 前置詞句の性質について*

浜 崎 通 世

1. よく知られているように、先行する動詞との結び付きの緊密さによって、前置詞句をいくつかの種類に分けることが出来る。¹

- (1) a. He worked at the office.
- b. He laughed at ten o'clock.
- (2) a. He worked at the job.
- b. He laughed at the clown.

(Chomsky (1965, p. 101))

(1 a - b)では、前置詞句at the officeやat ten o'clockは全体として、動詞句を修飾する働きを担っている。それに対して(2 a - b)では、前置詞句at the jobやat the clownが全体として、動詞句を修飾する働きを持つというよりはむしろ、work atやlaugh atなどの動詞と前置詞との連続によって、一定の意味が表されている。別の言い方をすれば、(2 a - b)において前置詞atは、動詞workやlaughによって指定された要素である。したがってある意味で、動詞と前置詞句の結び付きは(1 a - b)の場合よりも(2 a - b)の場合の方が、より緊密である。以下では、(1 a - b)のような場合を付加部の前置詞句、(2 a - b)のような場合を補部の前置詞句と呼ぶことにする。²

このように動詞との結び付きの緊密さの程度によって、前置詞句を補

部と付加部とに分類するとき、前置詞句によってはどちらに属するのか意見が分かれる場合がある。そうした事例の一つとして、本論ではaboutを主要部とする前置詞句（以下aboutPP）について考える。

2. (1 a - b)のように前置詞句が動詞に対して独立的なふるまいをするとき、前置詞はそれ自体の項構造を持つが、(2 a - b)のように前置詞が動詞によって指定されているとき、その前置詞自体は項構造を持たないとする考え方がある(Reinhart and Reuland (1993, p. 663), Marantz (1984))。前者の場合、前置詞はその目的語を項とするが、後者の場合には前置詞が項構造を持たないので、その目的語は前置詞ではなく動詞の項となる。Reinhart and Reuland は、付加部の前置詞句と補部の前置詞句の間にこのような違いを仮定した上で、もし aboutPPが付加部であれば、(3 a)と(3 b)、また(4 a)と(4 b)のような対照を、以下で述べる条件Aによって説明できるとしている。

(3) a. We talked with Lucie about herself.

b. *We talked about Lucie with herself.

(Reinhart and Reuland (1993, p. 715))

(4) a. I talked to Thmug about himself.

b. *I talked about Thmug to himself.

(Jackendoff (1972, p. 152))

(3 a - b)と(4 a - b)のいずれの例においても、動詞が二つの後続する前置詞句を持ち、先行する前置詞句に含まれる要素が、後続の前置詞句に含まれる再帰代名詞の先行詞となっている。こうした場合、(3 b)や(4 b)によって示されているように、aboutPPに含まれる先行詞と後続の

前置詞句に含まれている再帰代名詞との間に、同一指示の関係が成立しないことが観察されている。

ところでReinhart and Reulandの条件Aは、再帰代名詞の分布を説明する一般的な条件として、提案されたものである。この条件Aによれば、再帰代名詞は外項を持つ述部の項であるとき、その述部のいずれかの項を先行詞としなければならない。³ 例えば動詞は外項を持つので、動詞の項の再帰代名詞は、その動詞のいずれかの項を先行詞としなくてはならない。したがって(5)は非文法的である。

(5) a. *She gave myself a dirty look. (Reinhart and Reuland, p. 669)

この文では、再帰代名詞myselfは動詞giveの項であるが、giveはmyselfの先行詞となる項を持たない。したがって条件Aにより排除される。それに対して次のような例は、条件Aによって排除されない。

(6) a. There were five tourists in the room apart from myself.

b. Physicists like yourself are a godsend.

b. She gave both Brenda and myself a dirty look. (*ibid.*)

(6 a - b)では、再帰代名詞は前置詞apart fromやlikeの目的語であるが、これらの前置詞が外項を持たないとすれば、条件Aは適用されない。(6 c)では、再帰代名詞自体は動詞giveの項となっていないので、条件Aは適用されない。

この条件Aによって、(3 a - b)は次のように説明される。(3 a)において、もしaboutPPが付加部であるなら、その目的語の再帰代名詞はaboutの項である。しかし前置詞は外項を持たないので、条件Aを課されない。(3 a)はしたがって、条件Aとは無関係に文法的である。それに対して(3 b)において、withPPが補部であり、その目的語の再帰代名詞が

動詞の項なら、動詞は外項を持つので、その動詞のいずれかの項を先行詞としなくてはならない。しかし(3 b)においては、適当な先行詞が存在しない。aboutの目的語のLucieは、動詞の項ではなくabout自体の項である。したがって(3 b)は非文法的である。(4 a-b)も、もしtoPPが補部なら、(3 a-b)と同様に説明される。

しかしaboutPPが付加部であるという仮定には、次のような問題がある。まず補部と付加部との間の語順の問題である。(7)-(8)に示すように、補部の前置詞句は付加部の前置詞句に先行するとされている(Radford (1988, p. 235))。(7 a)と(8 a)では、補部の前置詞句が付加部の前置詞句に先行しているが、(7 b)と(8 b)では、逆に付加部の前置詞句が補部の前置詞句に先行している。

- (7) a . He worked at the job at the office.
b . *He worked at the office at the job.
- (8) a . He laughed at the clown at ten o'clock.
b . *He laughed at ten o'clock at the clown.

(Radford (1988, p. 235))

しかしaboutPPが他の前置詞句と共に起こるとき、これら二つの前置詞句の語順は自由である。

- (9) a . I talked about the problem to my doctor.
b . I talked to my doctor about the problem.

(Radford (1988, p. 352))

(9 a)ではaboutPPはtoPPに先行しているが、(9 b)ではその逆である。もしこの観察が正しいなら、このような語順の自由さは、Jackendoff (1990, p. 445)やRadford (1988, p. 352)の言うように、これら二つの前置詞句がい

ずれも動詞の補部であることから生ずると考えられる。

aboutPPが付加部であるという仮定についてのもう一つの問題として、疑似受動文に関する事実がある。(10 a)と(11 a)に示すように、補部の前置詞句の場合、その目的語を受動文の主語にすることが可能であるが、(10 b)と(11 b)に示すように、付加部の前置詞句の場合にはそれが不可能である。(Chomsky (1965, p. 105))

(10) a . This job is being worked at quite sincerely.

b . *The office is being worked at.

(Chomsky (1965, p. 105))

(11) a . This job needs to be worked at by an expert.

The clown was laughed at by everyone.

b . *This office is worked at by a lot of people

*Ten o'clock was laughed at by everyone.

(Radford (1988, p. 233))

それに対して、aboutの目的語を受動文の主語にすることは、可能である。

(12) John was talked about. (Hornstein and Weinberg (1981, p. 65))

したがってaboutPPは、疑似受動文に関して補部の前置詞句としての性質を示していることになる。⁴

Reinhart and Reulandは、aboutPPを付加部とする独立の理由として、二つの点をあげている。一つは、一人称の再帰代名詞が文中に先行詞を持たないとき、それがwithの目的語である場合よりも、aboutの目的語である場合の方が、容認可能性が高いということである。

(13) a . *Can you talk with myself about Lucie?

(Reinhart and Reuland, p. 715)

b. Can you talk with Lucie about myself? (ibid.)

Reinhart and Reulandはこれらの例を、以下のように説明している。(13 a)においてwithPPが動詞の補部であり、withの目的語の再帰代名詞が動詞の項であるなら、条件Aによりこの再帰代名詞は、動詞のいずれかの項を先行詞としなければならない。しかし適当な先行詞が存在しないので(13 a)は非文法的である。一方(13 b)において、aboutPPが動詞の付加部であり、aboutの目的語の再帰代名詞が前置詞自体の項であれば、前置詞は外項を持たないので、条件Aは適用されない。したがって(13 b)は条件Aとは無関係に文法的である。(13 a - b)に示される対照は、条件Aを仮定する限り、aboutPPが付加部であるという仮定から導かれることになる。

もう一点は、aboutの目的語となる代名詞が、同一文中に先行詞を持ち得るということである。

(14) a. *Max speaks with him. (Reinhart and Reuland, p. 661)

b. We talked with Lucie_i about her_i. (Reinhart and Reuland, p. 715)

付加部の前置詞句のように、前置詞自体が場所や時間の意味を持つ場合、その目的語となる代名詞が同一文中に先行詞を持ち得ることは、よく指摘される事実である。

(15) a. They had the whole afternoon before them.

(Jespersen (1933, p. 112))

b. John_i found a dollar bill in front of him_i. (Hestvik (1991, p. 464))

c. John_i left Mary behind him_i. (ibid.)

d. John_i located the treasure right beneath him_i. (ibid.)

しかしaboutPPの場合には、同一文中に先行詞がある場合、その目的語に

代名詞ではなく再帰代名詞を用いる方が、むしろ普通であると思われる。

(16) John_i talked about *him_i/himself_i. (Hestvik (1991, p. 474))

この点でaboutPPは、(17 a - b)に示すような補部の前置詞句と同様の性質を示していることになる。

(17) a . He looked at himself behind you! (Jespersen (1933, p. 112))

b . John_i always relies on *him_i/himself_i. (ibid.)

これらの例では、look atやrely onといった動詞と前置詞との連続によって、一定の意味が表わされている。したがって(17 a - b)の例に含まれるのは、典型的な補部の前置詞句であり、aboutPPはこれらの前置詞句と同じ性質を示していることになる。⁵

以上のことをまとめると、Reinhart and Reulandの条件Aを仮定すれば、aboutPPを付加部とすることによって、(3)-(4)のような従来から問題とされてきた例を説明できるが、aboutPPが付加部であるという仮定に対する根拠が乏しい。この仮定に対してReinhart and Reulandは、(13)-(14)のような、(3)-(4)とは独立の根拠を示している。しかし後者の(14)については、ちょうど上で述べたような問題がある。またその他の点でも、この仮定には(7)-(12)に示したような問題がある。したがってもし(3 b)と(4 b)が容認不可能であることについて、aboutPPが付加部であるという仮定に依る以外の説明が可能なら、これを補部とする方向にも一層の再考の余地が生ずることになる。

それではその場合、(3)-(4)についてどのような説明が可能だろうか。久野(1978, p. 243)は、再帰代名詞の先行詞が主語ではないとき、その先行詞は「人間」でなくてはならないという、「非構文法的要因」による説明を提案している。まず次のような例を考える((18)-(19)の例文は久野

(1978, pp. 242-243)より引用)。

- (18) a . ?Mary wrote to John about himself.
- b . *Mary wrote to Harvard about itself/themselves.
- c . This university overextended itself in the sciences in the
 1960s.

(18 a)では先行詞がJohnという「人間」であるが、(18 b - c)では先行詞はHarvard及びthis universityであり、いずれも「人間」ではない。(18 b)では更に、それが主語ではないので、容認不可能である。次の例も同様に説明されるとしている。

- (19) a . ?John asked Mary about herself.
- b . ?John interrogated Mary about herself.
- c . *John discussed Mary with herself.

(19 a - c)において、先行詞はいずれの場合にも動詞の目的語となるMaryである。久野は、(19 c)において、この目的語は、Maryという人間そのものではなく、「Maryのこと」という事柄を指すので、先行詞として不適切であるとする。照応表現に特有のこうした制約が実際に存在するなら、Kuno and Takami (1993, p. 144)の言うように、(3 b)や(4 b)のような文の「悪さ」は、aboutの目的語が事柄を表すことに起因している可能性もある。⁶

もしそうなら、(3 b)や(4 b)の文は、仮にaboutPPが補部であり条件Aによって排除されないとしても、「非構文法的要因」により容認不可能であるということになる。いずれにせよ、(3)-(4)に示される例は、aboutPPを付加部とする強い証拠とは言えない。

3. 以上aboutPPの性質について、それが動詞の補部であるか付加部であるかという観点から、考えた。Reinhart and Reuland(1993)は、もしaboutPPが付加部であるなら、彼らの提案する条件Aによって、(3)-(4)のような従来から問題とされてきた例を説明できるとする。条件Aは再帰代名詞の分布を説明する一般的条件として提案されたものであり、もし(3)-(4)をこのような一般的条件の帰結として説明できるなら、それは好ましい結果である。しかしaboutPPを付加部とする独立の根拠が乏しい。したがってもしこれらを条件Aによらず説明することが可能なら、aboutPPを補部とする方向にも再考の余地があると思われる。こうした説明の一つとして、久野(1978)やKuno and Takami(1993)の分析を紹介した。もちろん久野らの分析だけが唯一の可能性であるというわけではないが、いずれにしても、(3)-(4)を条件Aの延長線上で捉えることには疑問が残る。aboutPP自体の性質についてさらに考察が必要である。

注

※本稿は、『外国語研究』33号(愛知教育大学外国語教室, 1997年)掲載の「Reinhart and Reuland (1993)における前置詞aboutの目的語となる再帰代名詞の扱いについて」と趣旨の重なる部分はあるが、新しく書き直したものである。

1. 詳しくはChomsky (1965, pp. 101ff.)を参照。
2. Chomsky (1965)自身は、こうした二種の前置詞句を区別するのに、これらの用語を用いているわけではない。
3. 条件Aの定式化は次の通りである。

(i) 条件A

A reflexive-marked syntactic predicate is reflexive.

“syntactic predicate” は、次のように定義される。

- (ii) The *syntactic predicate* formed of (a head) P is P, all its syntactic arguments, and an external argument of P (subject).

The *syntactic arguments* of P are the projections assigned θ -role or

Case by P.

“reflexive-marked” および “reflexive” は、次のように定義される。

(iii) a. A predicate (formed of P) is *reflexive-marked* iff either P is lexically reflexive or one of P's arguments is a SELF anaphor.

b. A predicate is *reflexive* iff two of its arguments are coindexed.

4. 次のような例は容認不可能である。

(i) *John was talked to Harry about. (Hornstein and Weinberg (1981, p. 65))

こうした例に対する一つの説明は、疑似受動文が可能なのは、動詞と前置詞等が、隣接して意味的に可能な語となっている場合に限られる、という独立の条件を仮定することである。本文(12)の例文中のtalk aboutはdiscussの意味を表すが、(i)の例文中のtalk to Harry aboutは意味的に語としての分析が不可能である。Hornstein and Weinberg(1981)を参照。

5. (14 b)のような例文自体についても、判断に揺れが見られるようである。例えばBaltin and Postal (1996, p. 133)はこれを容認不可能としている。

6. このことに関連して、Kuno and Takami (1993, p. 144)は次のような制約を提案している。

(i) An NP lower in the Humanness Hierachy cannot serve as trigger for reflexivizing or reciprocalizing an NP higher in the hierachy:

Humanness Hierachy: Human > Nonhuman Animate > Inanimate.

参考文献

- Baltin, Mark and Paul Postal (1996). “More on Reanalysis Hypothesis.” *Linguistic Inquiry* 27, 127-145.
- Chomsky, Noam (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, Noam (1981). *Lectures on Government and Binding*. MIT Press, Cambridge.
- Hestvik, Alild (1991). “Subjectless Binding Domains.” *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 455-497.
- Hornstein, Norbert and Amy Weinberg (1981). “Case Theory and Preposition Stranding.” *Linguistic Inquiry* 12, 55-91.
- Jackendoff, Ray (1972). *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge.
- Jackendoff, Ray (1990). “On Larson’s Treatments of Double Object Construc-

- tions.” *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.
- Jespersen, Otto (1933). *Essentials of English Grammar*. Allen and Unwin, London (1983).
- 久野 暲 (1978). 『談話の文法』 大修館書店.
- Kuno, Susumu and Takami Ken-iti (1993). *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*. Chicago University Press.
- Marantz, Alec (1984). *On the Nature of Grammatical Relations*. MIT Press, Cambridge.
- Radford, Andrew (1988). *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge University Press.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993). “Reflexivity.” *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.